

茶の湯文化学会会報 No. 13

第13号 / 1997年4月25日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314

昨秋の東京大会で、川上紹雪氏の『不白筆記』をめぐっての研究発表を傾聴した。同書は、表千家流儀の稽古方法確立に寄与した川上不白（一七一九〜一八〇七年）の言行録であるが、私は、谷 晃氏の御好意により堀内家本の複写と江戸千家茶の湯研究室発行の翻刻本とを閲覧することができたので、思想上注目した点を述べてみたい。

とくに同書の巻首には、「茶之湯ノ事サ」（以下「事サ」は「ワザ」と記す）は、内なる「悟道」の表われであり、「内ニハ神ノ真ヲ納メ、外ニハ衆生ノ真ヲ露ハス。……心氣トワザト合体シテ行ハルル所、中道ノ真ナリ。……ワザハ尽ル、心氣ハ不可尽ナリ。此書ハワザ尽キテ後ノ為ノ物ナリ。」とある。これは、茶の稽古は結局は「中道ノ真」に到達すべきものだ、という意味であろう。

不白も、その師如心齋も、大いに禅を学んで「根性」を鍛えた。如心齋の制定した「七事式」やその一つである「且坐」は、禅語を借りたほどである。だが不白が、花月や数茶に対して「且坐は両者を合せた中道である」と説くときの「中道」とは、炭・花・香や無言・閑話などを含めてのさまざまなワザを融合させて

『不白筆記』における「中道ノ真」について

三崎義泉

いる含蓄があり、その且坐が「自然ト出来ル」ときが上達の目処とされる。この「中道」の会得を、茶の湯のあらゆるワザを窮めた上での「中道ノ真」にまで進めねばならない、……というのが巻首の思想であろう。

ところで不白は、花月におけるような薄茶も、その「ワザヲ極メ、ワザヲ離レテ、シカモ何ノコトナク只茶ヲ点ル様ニ成ル」ならば、その「一心」は、濃茶・唐物・真ノ台子にも通じる、と言っている。つまり、点茶とは主と客とがあつてのワザなのだから、主の「真成ルヲ見テ客モ己ガ真ヲ樂ム」のであり、そのように主客一致して「本分田地ニ住スル」のが茶の本意なのだ、と説くのである。そこは「本一物ナシ」という極致である。また、自分のだけでなく、すべての人の心の奥底に本来の自性を見つけたところの、「見性成仏」の境地である。巻首にいう「心氣」は、このよいうな「神ノ真ヲ納（受）」するまで進むから「不可尽」なのである。このことを、「応無所住而生其心ト云フ所ニ至リ万事点前之工夫付キ申シ候。」とも言っている。かくして、「点前ハ何トナク行フヲ円キト申ス也。」という名言が理解されよう。「ナンデモナイガ円キ物ナリ、」と言う不白は、茶の湯が本物となるための

第六回研究会報告

平成九年二月十六日午前十時、沖縄県那覇市の沖縄県立芸術大学奏楽堂において、第六回研究会が開催された。当学会の行事が沖縄で行なわれるのは初めてのことであり、事前に地元マスコミに取り上げられたこともあってか、天候のよくないなか一四九名という多数の参加を得て盛会となった。

倉澤副会長の挨拶のあと、沖縄開催に尽力いただいた沖縄県立芸術大学教授ホルスト・ジークフリート・ヘンネマン氏より歓迎のご挨拶があった。

引き続き第一部として、ミンナ・トルニアイネン氏の「わびについて」、前田孝允氏の「琉球漆器の変遷」。昼食をはさんで、第二部 廣田吉崇氏の「茶の湯点前比較研究の試み」、ヘンネマン氏の「琉球王朝の茶の湯」―受容史における喜安の実像と利休流伝来の一考察―。第三部として金武正紀・赤沼多佳氏の「沖縄の出土土目について」の五本の研究報告が行なわれた。

発表1 わびについて
ミンナ・トルニアイネン
「紹陽侘びの文」・「南方録」・「禪茶録」にあらわれている、わびについて考えてみたい。「禪茶録」にはまず、人間の表面的なわびの姿としてのわびが説かれているが、心としてのわび、つまりわび心をより重要なものとしている。それは俗世間の誘惑から心が自由になった、心静かな境地、というものであり、「南方録」によれば、無心とも、悟りの

研究会での発表



「悟道」を示したのである。本物の茶とは、本当の茶の在り所を切り開くこと、茶によって自分とすべての人々の真実に到達すること、そこに思い及ばなければならぬ。

臨済禅はつねに、各自の行住坐臥と無作とに即した真如開顯を教えたから、不白においてもまず禅の感化を重んじなければならぬ。だが、右の〈真実の探求〉に「中道ノ」という冠辞があることよって、私は、禅宗渡来に先立つ平安初期からの仏教日本化の動向―とくに円頓止観と純密とが統合されて各自なりの仏道成就が探求されていたこと―を顧みる必要を感じる。とりわけ安然の「随縁真如」論の「一切即一、一即一切」の思想は、人々に、刻々に白覚されるかりそめの感覚や思念の只中に実相中道を体得する観心を啓発したように思われる。和歌における俊成の「本の心」や、世阿弥の「妙」や、雪舟の無墨無筆の境などは、おのれのしわざにおいて真如が具現できるという〈芸術における真実(アレーティア)の探求〉であろう。

利休を継承しながら茶を普及させた不白の芸道は、日本人がそれぞれの芸術を本格的に追求するようになった歴史に照らしても考察すべきだと、「不白筆記」のここかしこに痛感している。

境地ともいうものである。また同書では無心の境地からあらわれる心を直心という。また

「紹陽侘びの文」でいう慎み深くおごらない心も直心といえよう。

姿としてのわびに対して、わび心としてのわびに至るには、修行が必要である。この修行とは仏法のそれに他ならない。これについては、「禪茶録」・「南方録」も同じく説くところである。そこでは日常生活における修行の重要性もあわせて説かれている。それは

六波羅密を行なうことである。

これにより「南方録」の定家の和歌にあるように、無一物の境地に至ることである。このような境地に到達すれば、点前の所作はいかにも自然なものになるであろう。

発表2 琉球漆器について

前田 孝允

琉球漆器の歴史は十四世紀には確立していた。琉球漆器は王国の重要物産であり、唯一王府の手厚い保護のもと「貝摺奉行所」で制作された琉球を代表する美術工芸品である。

一六〇九年の薩摩侵攻後は、政策的に中国製品として制作され、明治以後は王府の保護は解け民間工房で日常の生活用品を中心に制作された。第二次大戦後は、米軍や本土の観光客の土産品となり、実用品から遠ざかり、関係者を喚び寄せたが、最近では本来の朱塗を中心に実用品も増えてきている。

琉球漆器の技術・技法については、①旧王朝時代、②新王朝時代、③明治以後、④第二次大戦以後、⑤日本復帰以後の五つに区分できる。朱塗が中心で、材料は沖縄近海でとれる夜光貝を使用した「朱螺鈿」と「沈金」の技法が主であったが、時代により模様には変

化がみられ、また黒塗の青貝製品なども制作されている。

琉球漆器がすぐれた漆芸品として今もあるのは、沖縄の高温・多湿の気候と、木地として使われるデイゴ材に因るところが多い。

発表3 茶の湯点前比較研究の試み

廣田 吉崇

点前は茶の湯の精神の端的な表現の一つとの観点から、現在行われている各流派の点前の客観的な比較分析により、点前の変遷や各流派の考え方が推測できないかを考える。

具体的には、市販の点前の手引き書等を利用して、主に十一流派(藪内流、遠州流、宗和流、鎮信流、肥後古流、宗偏流、江戸千家、表千家、裏千家、官休庵、大日本茶道学会)の薄茶風炉平点前の所作・手順等を三十八項目に分解し、各項目四種以内の類型化を試みる。これを一覧表にして、さらに項目ごとに二つの流派の点前を比較して、類型が一致する項目の占める率を一致率と規定し、グラフ化する。これらをもとに、項目別分析(時系列的分析)及び、一致率による分析を行う。

分析結果から、点前の原形はわかりにくいものの、千家流においては、宗旦の時代に佐



研究会後の懇親会

びの深化による点前の改変が行われ(宗日革命)、その後如心斎・一燈斎の頃に点前の簡略化があり(如心・一燈革命)、さらに女点前が三千家において考案され、前後して三千家の点前が分化したのではと推測される。また、武家茶においては、遠州流には独自の点前の改変が見られる(遠州革命)。石州流は、遠州流と異なり、利休の侘び茶に近い存在であり、外部からの千家流の影響というよりも、もともと内在していたものと考えられる。

この推論結果については、「茗理正伝」、「如心斎遺言」、「槐記」の三つの文献からもその可能性がうかがえる。

さいごに、点前の変化の可能性の背景を説明するため、武家茶と家元制の経済基盤の違いを指摘し、江戸期の流祖的茶人の類型化を試みる。また、遠州流、石州流、千家流のあり方の違いをマックス・ウェーバーの支配の三類型である、カリスマ的支配、伝統的支配、合法的支配の議論を用いて、説明を試みる。

発表4 琉球王朝の茶の湯

―受寄史における喜安の肖像と利休伝来の一考察―
ホルスト・ジークフリート・ヘンネマン
琉球における茶の湯の発端は、室町中期に

遡るが、廃藩置県・第二次世界大戦の沖縄戦の戦禍などにより、その文献資料は殆ど残存していない。それは琉球における茶の湯が受容文化であったことと、王府茶礼として王家などの上流社会にとどまり、庶民とは縁遠いものであったことにもよる。

永享元年の尚氏による琉球統一後、王国の国造りは海上中継貿易により形成された。以後、物の交換と、心の交流が展開されるが、一四九二年に尚真王が先王の尚円の菩提寺として、禅院円覚寺を建立したことの意味は大きい。天文二年(一五三三)に来琉した冊封使陳侃が残した『使琉球録』には、天界寺・円覚寺の伽藍の様子を描写され、ここで茶礼が行なわれ、抹茶を供されたことが記されている。

慶長五年来琉した泉州堺出身の喜安は、尚寧王に仕え、琉球王府の茶道をつとめ、利休流の茶の湯を伝授したが、そもそも喜安の来琉の目的が茶道普及にあつたかは明確にしない。私は喜安が琉球王府に利休流茶道を伝えたのは、尚寧王自身との関係によるものであつたとしたい。また『茶道系譜』に「父道三」とあるが、これは宮王道三のことであろう。『喜安日記』によれば、慶長十五年將軍秀忠との謁見後、帰途大坂で片桐且元・貞昌兄

が、那覇空港で合流し、研究会当日をはさんで初日の午後、第三日目の全日、および最終日の午前、沖縄各地をバスで廻った。参加者のなかから佐伯静子さんにその感想をお寄せいただいたので左に紹介する。

第六回研究会に参加して

佐伯 静子

沖縄で研究会、マア、うれしい。遊び半分勉強半分の楽しい気分に参加させていただきました。二月十五日十三時五十分那覇空港に着き東京グループと合流して観光バスで首里

弟との交流が知られるが、これは琉球国王に対するものというより、兄弟と喜安の個人的関係の深さを物語るものである。また島津侵攻を招いたのも、大和の風日本への教養である大和芸能に通じたためという。

薩摩藩の琉球侵攻以降、琉球の政治的現実を反映したものは、寛文七年(一六六七)公付された檄羽羽地王子朝秀の「仕置」である。ここには日頃大和芸能の諸芸に通じたければ、たとえ良家の者でも用いないことが明記され、諸芸を修めることが琉球王家に仕えるものにとって必須であることをいう。その諸芸の中には茶道も入っており、喜安以来の王府の茶道職の継続にもその精神は生かされている。

また尚貞王の九年(一六七七)御茶屋御殿が創建されるが、これにより近世琉球文化は開花の時期を迎える。

発表5 沖縄出土の天目について

金武正紀・赤沼多佳

琉球は、「北山」・「中山」・「南山」の三山鼎立時代を経て、中山王尚巴志により一四二九年に統一される。しかし統一前から三山王各々によって中国と貿易が行なわれてい

観光に出かけました。守礼の門や首里城見学に時間をかけすぎて、県立博物館では三十分程しか時間がなく、主な展示を駆け足見学になつてしまいました。でもこれが研究会でのお話を伺うのに大変参考になりました。

研究会当日、朝から雨模様でしたが県立芸術大学の奏楽堂は沢山の参加者で盛会です。ミンナ・トルニアインさんの「わびについて」の発表は、流暢な日本語で日本人にとつても難しい「紹鴎侘びの文」についてなどの研究に感心しながら聞き入りました。前田孝允さんの「琉球漆器の変遷」について、琉球漆器についてまったく白紙の状態で拝聴しましたので、スライドを見ながらのお話は興味深く聞かせていただきました。十八日に浦添美術館に行き沢山の琉球漆器を見て中国漆器の流れをくむ工芸技法の多種多様さ(螺鈿、沈金、堆錦、箔絵、密陀絵)素嗜らしさに改めて目を見張りました。

第二部は、廣田吉崇さんの「茶の湯点前比較研究の試み」、ヘンネマン先生の「琉球王朝の茶の湯」について。先生のゼミの学生さんに伺いますと、先生は日本のことを日本人以上によく御存知で、わからない言葉、漢字等をお聞きすると「ワカリマセンカ?それは

た。今帰仁城跡、首里城跡、ヒヤジョー毛遺跡、銘苅原遺跡からは大量の中国製の天目が出土している。天目といえは建窯のものと考えられがちであるが、これらは福州で生産されたものであり、何れも一四、五世紀のものである。建窯のものは今帰仁城跡から一点のみ確認されている。(金武)

『君台観左右帳記』に現われる天目は、燿変・油滴・建窯・烏蓋というように位付けされている。その最後に出てくる灰被については、従来産地が不明であつたが近年福建省で生産されていたことが確認された。そこでは同時に白胎の天目も発掘されている。これらについて、中国の研究者は南宋末としているが、元初としてもよいのではないかと考えられる。ただ物というのには生産地における出土と、出土地における時間との間に時間差があることを弾力的に考えていかなければならない。(赤沼)

学会参加ツアー報告

沖縄で研究会を実施するにあたって、研究会参加ツアーを募集したところ、四十三名の参加者があつた。東京と大阪に発着は別れた



ツアースナップ (やむちんの里にて)

こういう事なのですよ」ととても丁寧に教えて下さるという事でした。

第三部は、金武さんと赤沼さんの「沖縄出土の天目について」で、前日県立博物館を駆け足見学したのが役に立ちました。

第三日目、嘉手納基地を横目に見ながら読谷村、やむちんの里に行き登り窯の見学、琉球村でハブとマングースのショーを見ました。

その後、ハブの粉を一サジずつもらい、水で飲み下しましたが、骨を焦がしたような味でも皆さん元氣モリモリ……。夕方一旦ホテルに帰り改めて「尚家遺品展」を見に行き、その後、琉球宮廷料理をいただきに「美栄」にまいりました。古い琉球建築のお店がビルとビルの谷間にあり風情のあるお料理屋さんでした。さすが宮廷料理、すべて火を通したもののばかりで、生ものは一切出ませんでした。泡盛を飲んで、宮廷料理を食べ、国際通りを散策して、沖縄最後の夜は更けてゆきました。遊びに、勉強に、大変有意義に、また楽しく過ごさせていただいた四日間でした。気温十四度前後で気候もよく紺寒桜が満開でした。四日目、那覇を後に一路伊丹へ、伊丹の気温は一度、山は真白に雪景粧、ああ沖縄がなつかしい！アツという間の四日間でした。

へと、次々に大きな変化をとげた。その大窠から登り窯への転換期に、こうした美濃陶がつくられた前後関係、平行関係があらためて問題になっているとのことであつた。

竹内氏は用意された多数のスライドを映写しながら、まず織部をとりあげ、その図柄が蒔絵や辻が花にみられる当時の工匠や流行から多くを取り入れていることを示された。そのうえで志野の絵は織部とは異なっており、こうした絵柄がどのように生まれたのか、またどんな茶人がこれを好んだのか検討する必要があると指摘された。

赤沼氏は茶会記に見られる和物茶陶の使用について、天正十四年に急激な変化があり、唐物がすたれて種々の和物茶碗が使われるようになったことを示された。その中の一つに「セト白茶碗」（「松屋会記」三月二日条）があり、それが志野の初出であるというのが定説になっていた。

ところが最近考古学の方から大阪城の発掘では慶長三年以前の層からは志野が出土せず、志野の出現は天正年間までは上がらないとする説がでてきている。それについて赤沼氏は桃山期の茶の湯が一様ではなく、室町を引きずる茶人と新しいものをめざす茶人がい

例会報告

東京例会

担当・高橋忠彦

第四回東京例会が一月二十五日午後二時より東京学芸大で、開催された、内容の概要は左の通り。

南宋咸淳5年（一二六九）に著された『茶具図贊』は、当時の茶器十二種の図を描いたうえ、擬人化して、官、名、字、号を付け、さらにその機能を贊にまとめたものである。その価値に比べて、研究が進んでいなかったが、近年、廖秀秀氏が『宋代喫茶法与茶器的關係』の中で、絵画資料、考古文物と比べ合わせた、茶器十二種の研究をされている。ただ、まだ問題は残る。特に、官、名、字、号および贊の文章に込められた真意に沿った検討が必要であろう。今回の発表は、その観点から、茶器十二種の中でも、問題の多いものを中心に考察した。いくつか結論だけ述べれば、韋鴻臚は、茶焙と茶籠を兼ねていること、木待制は、砧椎というより、くぼみに入れた固形茶を杵様のものので砕く道具で、茶臼と呼ぶべきこと（奏観の「茶臼」誌によれば、北

で、さまざまな茶の湯が併存する状況だったのではないかと、この考えを示された。造形的にみても、長次郎が手作りで真円の茶碗をつくる一方で美濃では轆轤で作りながらわざと形を歪めており、相反するものが同時期にあつたからである。

その後は討論、参加者との質疑応答が行われたが、谷氏が締めくくられたように、考古、伝世、文献の各アプローチが相まって陶磁史が明らかになっていくことが実感された。

総会のご案内

平成九年度の総会を左記のごとく開催しますので、多数の方の参加をお待ちしています。なお詳細については、後日会員の皆さんへご案内をさしあげます。

日時 平成九年六月七日（土）

午前十一時より

内容 議事（午前）

見学会（午後）

場所 議事は京大会館（京都市内）にて、

見学会は大徳寺山内の茶室を予定しています。見学生は現在交渉中です。

宋期に団茶を砕くための専用の茶臼が考案され、好事家に用いられていた。廖氏も指摘しているように、大徳寺蔵の五百羅漢図が参考になる。また、胡員外は、茶を磨り潰す道具としての茶瓢であると思われること（方岳の「茶僧賦」に、宋代に茶僧とも呼ばれた茶瓢が描かれ、その実態をかいま見ることができる。）などである。

近畿例会

第三回近畿例会は植崎彰一、赤沼多佳、竹内順一の三氏により「美濃桃山陶の諸問題」をテーマに行われる予定だった。しかし直前に植崎氏が体調を崩されたため、赤沼、竹内両氏の報告と谷晃氏を交えての討論にプログラムが変更された。

はじめに赤沼氏が植崎氏の用意されていた資料について、美濃陶についての従来の整然とした編年が崩れ、新しいものができつつあること、その鍵となるのが植崎氏らによつて最近調査された「元屋敷東第三窯」という、これまでに知られていなかった同第一、第二窯の中間期の大窠であることを紹介された。

桃山期の美濃茶陶は大窠で焼かれた瀬戸黒・黄瀬戸・志野から登り窯で焼かれた織部

海外よりの便り（三）

④中国国際茶文化研究会より

厳しい暑さの続くこの頃、いかがお過ごしでしょうか。

貴会と中国国際茶文化研究会とが学術交流関係を結ぶことに関するお便り拝受しました。

中国国際茶文化研究会は、貴会が日本茶文化界の精鋭を集め、茶文化学術領域で多くの研究成果を挙げ、かつ日本唯一の超流派の茶文化学術研究団体であることに敬意を表します。両会が交流関係を結び、中日の茶文化の交流と提携を深めるといふ貴会のご提案は、まさにわれわれの望むところでもあります。

それ故、当会の会長会議において、すぐに同意と支持を得ました。そして今年五月二十七日、「第四回国際茶文化シンポジウム・ソウル大会」の期間に開催された中国国際茶文化研究会第二理事会において、参加した理事と会員代表は一致して、中国国際茶文化研究会と日本茶の湯文化学会が正式の学術交流関係をもち事を可決しました。

中国国際茶文化研究会は一九九三年十一月八日、国家民政部の許可を得た上で、正式に

発足しました。既に一九九〇年以来、国内・国外において四回の国際茶文化シンポジウムと数回の大型国際茶文化活動を成功裡に挙行しました。第一回の国際茶文化シンポジウムは一九九〇年十月浙江省杭州において挙行されました。海外九ヶ国と国内諸地域から百九十余名の代表が参加し、論文四十九篇が寄せられました。第二回国際茶文化シンポジウムは一九九二年三月湖南省常德で開かれ、九ヶ国百九十余名の代表が参加し、論文四十篇が寄せられました。第三回国際茶文化シンポジウムは一九九四年八月、雲南省昆明市で開かれ、六ヶ国三百余名の代表者が参加し、論文四十五篇が寄せられました。第四回国際茶文化シンポジウムは一九九六年五月二十五日から二十八日まで韓国ソウルにおいて開かれ、中国、日本、韓国、アメリカ、マレーシア、台湾等から六百余名の代表が参加し、論文三十九篇が寄せられました。一九九一年五月、国家旅遊局、浙江省人民政府と共催で、第一回「第一回杭州国際茶文化節」を挙行しました。一九九二年からは、毎年春に茶葉博物館と連合して「国際西湖茶会」を挙行しています。一九九三年十一月、浙江省湖州市人民政府、湖州陸羽茶文化研究会と共催で「茶聖陸

羽誕生千二百六十周年記念行事」を挙行しました。一九九四年十一月、陝西省法門寺博物館と共催で「第一回法門寺唐代茶文化国際学術シンポジウム」を挙行、……等々。このような茶文化の大型国際会議とイベントを挙行することによって、多くの人々に茶文化を再認識させ、新時代の精神文化の建設に対して茶文化に積極的なはたらきをなさしめました。これによって茶文化は、ますます社会に歓迎されるようになりました。

中国国際茶文化研究会理事会は、顧問、理事、名誉理事百二十余名からなり、中国のすべての茶業団体を代表しており、茶文化を研究主体とする、中国で唯一つの学術研究団体です。会員の範囲は最も広く、最も多くの活動をし、最も大きな影響を与えている、茶に関する独立の社団法人です。交流の内容については、私たちは貴会の提案に同意します。まず刊行物の交流から始め、今後の交流項目を相談していききたいと思います。

ここで私たちが特に感謝したいのは、両会の交流と中日茶文化交流等における、貴会の倉澤行洋先生と東君女史の努力と貢献です。

そこで倉澤行洋先生と東君女史に、両会間の連絡担当をお願いすることを提案します。

中国国際茶文化研究会は、日本茶の湯文化学会と学術交流関係を結んだことを喜びとし、たえざる交渉、提携の強化、将来さらに多くの領域に交流をひろげていくことを望みます。私たちは、両会の交流責任者が一堂に集い、今後の連携交流の項目と内容について、ご一緒に検討することを提案します。

貴会の事業がますます盛んになりますように。各位がますますご健康でありますように。

(一九九六年七月十日付)

後記

* 二月に行いました沖縄での研究会は、ヘンネマン先生や沖縄県立芸術大学の皆さんの協力のおかげをもちまして、大盛会のうちに終了することができました。

従来、沖縄は茶の湯には縁の薄い土地だといわれてきましたが、研究会における発表を聞いていますと、茶の湯やそれに付随する美術工芸が盛んであったことがうかがえました。これを機会に、沖縄の茶の湯や美術工芸に関する研究がさらに進展することを期待します。